

# カント道徳哲学における人間性概念の諸相

高木 裕貴

## 1. 序論<sup>1</sup>

カントにおける「人間性」概念は近年ひととき注目されるようになってきている。その大きな理由は言うまでもなく、主に『道徳形而上学の基礎づけ』（1785年。以下『基礎づけ』と略記）において展開された定言命法の一つである、「人間性の定式」<sup>2</sup>の再評価という近年の風潮に起因するのであろう。この定式は、現代風に言うならば、人間性（人格性）の尊厳を守り、これを貶めないことを命じており、定言命法の「普遍的法則の定式」<sup>3</sup>に代表される「空虚な形式主義」（Hegel[1993:252]）というイメージを一掃するのに一役買うと期待されているのである。

しかし、かねてからこの定式には多くの問題がすでに寄せられている。そのすべてを枚挙することはできないが、その一つは、「人間性」概念の曖昧さである。つまり、人間性の定式において目的自体として扱われるべき「人間性」そのものが何なのか不明瞭なままなのである。もちろん、人間性の定式を支持する近年の研究者はこの人間性概念の内容を埋めようと努めてきたが、その意見は一致しているとは言い難い<sup>4</sup>。これはなぜだろうか。

---

<sup>1</sup> カントの著作から引用する際には、アカデミー版の巻数をローマ数字で、ページ数を算用数字で本文中に示す。引用文は概ね拙訳によるが、文献表で示した既存の邦訳書を適宜参照した。他の文献から引用する際には、その文献の執筆者、出版年、ページ数を表記する。文献表を参照のこと。引用文における〔〕は筆者による補足を、〔…〕は筆者による省略を示す。また、原典における強調は傍点によって示す。

<sup>2</sup> 「汝自身的人格および他のすべての人の人格における人間性を、決して単なる手段としてではなく、いつでも同時に目的として扱うように行為せよ」（IV429）。

<sup>3</sup> 「汝は、汝の格率が普遍的法則となることを、その格率によって同時に欲し得るような格率に従ってのみ行為せよ」（IV421）。

<sup>4</sup> その多様な解釈は、Dean[2006]とAllison[2011]において比較的簡潔にまとめられてい

その一因は、カント自身の記述が曖昧であることにあると言える。まず、人間性と同様に人間性の定式における重要な術語である人格ないし人格性は、比較的一貫した意味において使用されており、その内実は比較的容易に特定されてきた。これに対して、人間性の定式をはじめて提示した『基礎づけ』においてさえ、人間性は重要な術語でありながら、明確に定義されているとは言い難い。さらに、ヴィマー（Wimmer[1990:124]）が指摘するように、人間性概念は必ずしも同じ意味で使われていない。カントは実際に様々な著作においてこの概念を様々な意味において多用しており、その用法は一貫しているとは思われないのである。

また別の要因は、人間性の概念史がもつ複雑さにあろう。再び人格ないし人格性を引き合いに出せば、カントの人格概念をその概念史に位置付けるといふ試みは、カント研究の比較的初期になされてきたと言える。カント的人格概念の独自性は早くから気づかれていたのである<sup>5</sup>。これに対して、カント的人間性概念を人間性の概念史と結びつける研究はいまのところなされていない<sup>6</sup>。しかし、人間性概念は人格性概念に劣らぬほどの長く複雑な歴史をもっている。概念史を見てわかるのは、帝政ローマ期にキケロによって造語された *humanitas* は、他のヨーロッパ言語へと翻訳され、とりわけドイツ語においても複数の翻訳語が試みられたということであり、また他方でこの概念は内容的に見ても様々な変遷を遂げてきたということである<sup>7</sup>。言うまでもなく、カントの人間性概念とて、この概念史の複雑で込み入った流れのどこかに位置するのである。それゆえ、我々はカントにおける「人格性」のみなら

---

る。

<sup>5</sup> 人格の概念史、そしてカント的人格概念については、Trendelenburg[1908]、高坂[1952]、小倉[1965]、浜田[1974]、稲垣[2009]、小倉[2010]参照。

<sup>6</sup> 矢島[1952]は、人間性の概念史を扱う稀有な論文である。

<sup>7</sup> ここで細かく検討することはできないが、人間性の概念史についてさらに一言加えておこう。三木[1967]や Bödeker[1982]が指摘しているように、人間性には大まかに言って二つの潮流があった。一つは「人間にすでにいつでも備わっており、失われない人間性」、もう一つは「人間に備わっておらず、かえってその理想である人間性」である。我々は前者を「自然的人間性」、後者を「理想的人間性」と呼ぶことができるだろう。

ず、「人間性」についても慎重にならざるをえない。

上の二点を鑑みれば、先行研究において人間性概念が十分慎重に扱われているとは言いがたい。むしろ先行研究は人間性に関するあまりにも強い前提を知らずのうちに潜り込ませた上で、人間性概念の具体的内容を特定しようと努めてきたのである。それは、私なりにパラフレーズすれば、「人間性はすべての人間がすでに備わっており、動物によっては所有されえない」という前提であると言える。確かにこのような意味は、少なくとも現代日本においては一般的であるように思われる。しかし、上記の状況を鑑みれば、この前提こそ改めて問われねばならない。

また、ロールズとその弟子であるコースガードは、『基礎づけ』における人間性概念に対して、他の著作、とりわけ晩年の『道徳形而上学』（1797年）における人間性概念を当てはめようとする<sup>8</sup>。しかし、カントが様々な文脈・著作において異なる意味でこの概念を使用しているのであれば、彼らの解釈はあまりにも安易であると言わねばならないだろう。

そこで本稿では、「人間性」概念の諸相を整理することを試みる。さて、これまでには「人間性」に対してカントが使用している原語を併記してこなかったが、本稿が視野に入れるのは、カントの道徳哲学的著作において使用されている、*Menschheit*, *Menschlichkeit*, *humanitas* である。もちろん周知のように、人間性の定式において言及されているのはもっぱら *Menschheit* である。しかしながら、この定式における *Menschheit* 概念を解明するためにも、一先ずより広い射程を設けるべきであろう。そうでなければ、先に指摘した先行研究の二の舞になりかねないと考えるからである。周辺概念との差異によってはじめて *Menschheit* 概念もよりよく理解されるはずである。また、*Menschheit* に限らず、「人間性」概念の周辺を整理することは、カントの人間観を浮き彫りにすることに繋がるであろう。

---

<sup>8</sup> Rawls[2000:187-190] 邦訳 pp. 281-283, Korsgaard[1996:110].

本稿は次の手順で進められる。まず第二節において、カント晩年における *Menschlichkeit* 概念を検討する。第三節においては、*Menschheit* 概念がはじめて明確な形で取り上げられる『純粹理性批判』(1781年)の言明を整理する。第四節においては、主に『基礎づけ』と『実践理性批判』(1788年)における *Menschheit* 概念を、そして第五節においては『道徳形而上学』における *Menschheit* 概念を検討する。

## 2. *Menschlichkeit* の位置づけ

*Menschheit*、*Menschlichkeit*、*humanitas* の中で使用数が突出して多いのが *Menschheit* である。*Menschheit* に比して後者二つの使用数は非常にわずかである。しかし、カントは *Menschlichkeit* にのみあえて *humanitas* というラテン語を併記しており、またその使用数が少ないことから意味を特定しやすい。それゆえ、*Menschlichkeit* の意味を確定するところからはじめよう<sup>9</sup>。

カントは『道徳形而上学』の徳論において、「同情は一般に義務である」という節を設けている<sup>10</sup>。その中でカントは、他人に対する同感 (*Mitfreude*) と同苦 (*Mitleid*) という快不快の感情を能動的で理性的な好意 (*Wohlwollen*)<sup>11</sup> を促進するための手段として使用することは、「人間性 *Menschlichkeit* (*humanitas*)」という名称で通る特殊で条件づけられた義務であると述べる。なぜなら、ここで人間は単に理性的存在者 (*vernünftiges Wesen*) としてではなく、理性を付与された動物 (*mit Vernunft begabtes Tier*) としても見られるからである。すなわち、好意自身はあらゆる理性的存在者に要求されるのだが、同情をそのために使用することができるのは、有限な理性的存在者たる

---

<sup>9</sup> そもそも現代では *Menschlichkeit* と *Menschheit* の意味は重なる部分と重ならない部分がある。しかし、概念史上 *humanitas* が *Menschlichkeit* と訳された時期があり、カント自身が *humanitas* と付け加えていることからして、人間性という訳を当て、議論の俎上に載せよう。

<sup>10</sup> 本段落では、VI456 で展開されている同情の義務についてまとめる。

<sup>11</sup> ここでカントが言う「好意」とは、何らかの感情ではなく、「他人の幸せと平安を自己の目的とする能動的で実践的な好意 (好為)」(VI452) のことである。

人間なのであり、ここではこの意味での人間の人間性が問題になっている。そして、カントはこの感情は自然によって人間にすでに与えられていると考えているのだ。

さらに、『実践理性批判』においてさえ、「偉大で非利己的な、同情に富んだ心術と人間性 (Menschlichkeit) とが輝き出る行為を称賛することは、まったく的を得たことである」(V115) と言われている。ここでも同情と人間性が並べて言及されている。

最後に、Menschlichkeit と同情の強い結びつきは講義録においても垣間見られる。「ムロンゴヴィウス道徳論講義」(1780 年代前半) には、「人間性 (Menschlichkeit) は、他人の運命に対する同情である」(X X VII1541) という言明がある。また「コリンズ道徳哲学講義」(1780 年代中葉) においてもこれとまったく同じ説明がみられる。「人間性 (Menschlichkeit) とは、他人の運命への同情を意味する」(X X VII419) <sup>12</sup>。

以上のように、数少ない Menschlichkeit への言及においてカントは必ずといってよいほどこれを同情と言い換えており、また Menschheit を同情と結びつける記述は管見の限り見当たらないことから、少なくとも Menschlichkeit は同情の感情を指すと結論することは許されよう。

もっとも参考になるのは、晩年に近い時期に行われた「ヴィギランティウス道徳形而上学講義」である。ここでは『道徳形而上学』からの先の引用個所と合わせて、この講義録における Menschlichkeit への言及を検討していきたい。カントはこの講義録において、「著者 [=バウムガルテン] は [Ethica Philosophica の] 第 309 節において、人間愛 (Menschenliebe) を説明する際、彼は humanitas に依拠している」<sup>13</sup> (X X VII671) と指摘する。そしてここで

---

<sup>12</sup> 確かにこれらの講義においてカントはバウムガルテンの教科書に基づいて humanitas 概念を説明しているにすぎないということもできる。しかし、この懸念は次に紹介する「ヴィギランティウス道徳形而上学講義」における言明によって解消される。

<sup>13</sup> カントは形而上学講義のみならず、実は道徳哲学講義においてもバウムガルテンの著作、すなわち *Initia philosophiae practicae primae* (1740 年) と *Ethica philosophica* (1760 年) を

のバウムガルテンの *humanitas* 理解を次のように批判している。

もし *humanitas* が単に同情、すなわち他人の幸せへの参与 (*blos ein Mitleiden, Theilnehmung an anderer Menschen Wohl*)、そしてその限りで人間愛を意味するならば、[…] これは単なる *Menschlichkeit* であり、ほとんど何も述べることはない。(X X VII671)

*humanitas* はともかく、ここでの *Menschlichkeit* に対するカントの態度は非常に厳しい。カントが続けてあげるその決定的な理由は、「この感情は人間のみならず動物ももつ」(X X VII671) からである。つまり、カントはこの講義録において *Menschheit* という語をすでに多用しているにもかかわらず、動物ももちうる同情の感情、すなわちバウムガルテンのいう *humanitas* に対して *Menschheit* という語を当てることを拒み、*Menschlichkeit* という語を当てるのである。

ここで、同情としての *humanitas* は『道徳形而上学』においても扱われていたことを思い出したい。「ヴィギランティウス道徳形而上学講義」は、アカデミー版カント全集に収められた道徳哲学関係の講義において唯一「道徳形而上学」という言葉がタイトルに含まれている講義録であり、またこれは 1793-4 年に行われた講義の記録である。それゆえ、この講義と 1797 年に出版された『道徳形而上学』の間に連続性を読み込むことは可能であろう。ここで三点を指摘したい。

---

教科書として使用している。管見の限りでは、前者において *humanitas* への言及は見られないが、後者においてはわずかながら言及されている。しかも、*Ethica Philosophica* の中では「他者に対する義務」における「人間愛 (*amor hominum*)」という項の中で使われている例が多い。ここでバウムガルテンは、人間性を「博愛 (*philanthropia*)」(X X VII960-961) と結び付けていることは指摘されるべきである。バウムガルテンの著作については、カントのアカデミー版全集の第 27 巻第二分冊第一部に収められた *Ethica Philosophica* のテキストと、第 19 巻に収められた *Initia philosophiae practicae primae* のテキストを参照した。

まず第一に、カントは講義録とは違って『道徳形而上学』においては、「同情」自身には一定の肯定的な評価を与えていることが目を引く。ただし、同情は好意の「根拠」ではなくそれを実行するためのいわば「補助的手段」にすぎない。もし根拠であれば、『基礎づけ』や『実践理性批判』において展開された理性主義、そして感情主義批判と矛盾をきたすことになってしまうだろう。

そして第二に、カントはこの *humanitas* をもつ人間のことを「理性的存在者」ではなく、「理性を付与された動物」として捉えている。同情の感情は自然によって人間にすでに与えられているものであったが、ここでの人間とは理性的存在者ではなく、感性的存在者として捉えられているのである。講義録における「人間のみならず動物も同情の感情をもつ」という考えがここにも反映されているということが出来る。ただし、もちろん単なる感性的存在者たる動物には、カント的道德はあてはまらない。同時に理性的存在者として道德的主体たる人間においてのみ、この補助的手段が意味をなすのである。

最後に注目されるべきは、カントは『道徳形而上学』において“*Menschlichkeit (humanitas)*”という表現を採用していることである。講義録を参照した我々は、ここでカントが *humanitas* と付記していることにカントの肯定的意図を見出すことができない。ここでの *humanitas* とは、バウムガルテン的な *humanitas* を想定したものでしかないのである。

「*Menschlichkeit(humanitas)*という名称の下で」というカントの言い回しには、カントがこの *Menschlichkeit* という名称と距離を取ろうとしている態度さえ感じられるだろう。さらに、講義録における「この *Menschlichkeit* が言うべきことはほとんどない」という言葉通り、やはり『道徳形而上学』でこの *humanitas* が扱われるのはこの箇所のみであり、この *humanitas* はカントにとって重要なものではなかったのだ<sup>14</sup>。

---

<sup>14</sup> ちなみに、先の『実践理性批判』からの引用も、原理論ではなく、あくまで方法論にお

したがって、カントにとって *Menschlichkeit* としての同情、すなわちバウムガルテン<sup>15</sup>のいう *humanitas* について次のように結論することができる。確かにこの *humanitas* は、人間にすでに備わっており、同時に積極的に獲得されるべきものでもない。しかし、かといって動物はこれをもちえないのではなく、むしろもちうる。つまり、*humanitas* というラテン語を付記しておきながらも、カントは *Menschlichkeit*<sup>16</sup>を人間に特有なものと考えていないということがみてとれるのだ<sup>17</sup>。

### 3. 『純粋理性批判』における人間性概念

本節以降では、「人間性 (*Menschheit*)」概念の検討に移ろう。「人間性」という語が公刊著作において使われるのは、管見の限り『純粋理性批判』がはじめてである<sup>18</sup>。そこで、本節では『純粋理性批判』における人間性概念を整理した上で、次節以降では、時系列に沿って、道徳哲学的著作における人間

---

ける註の一部でしかない。このことから、*Menschlichkeit* 概念が純粋理性認識に基づく基礎づけではなく、有限な理性的存在者である人間を主題とした、経験的レベルに属すると理解することができる。

<sup>15</sup> カント以前に *humanitas* を他者に対する感情と理解した思想家には、バウムガルテンだけではなく、イギリス道徳感覚学派の思想家も含まれることに留意すべきである。ヒュームやハチスンの著作において *humanity* が「善意 (*benevolence*)」を意味していたことは注意すべき点であろう。カントが彼らの著作をドイツ語で読んでいたことは明らかである。カントの蔵書リストには、ハチスンの『美と徳の観念の起源』(1725年)『情念論：道徳感覚についての例解』(1728年)の独訳が見出される。ちなみに、カント以前の *humanitas* 概念を語る上で無視できないのがキケロである。カントが C. ガルヴェによる『義務について』(キケロ著)のドイツ語訳とコメンタリーを読んでいたのは明らかである。「キケロ書」(Garve [1986], Garve[1987])において *humanitas* はしばしば *Menschlichkeit* と訳されている(例えば, Garve[1987:259, 324])。また、「キケロ書」と『基礎づけ』の関係は Reich[1935]によって検討されている。カントの蔵書については Warda[1922]参照。

<sup>16</sup> したがって、カントの著作において *Menschlichkeit* を「人間性」および *humanity* と訳するのはミスリーディングである。日本語訳に関する案はいまのところないが、少なくとも英語においては *humanness* という便利な訳語を使用すべきだろう。

<sup>17</sup> カントは *Menschlichkeit* と比べられないほど *Menschheit* という語を多用するにもかかわらず、管見の限り後者には一度も *humanitas* というラテン語を付記していないことは注意されるべきである。

<sup>18</sup> もちろん、公刊著作以外では、「美と崇高の感情に関する考察」への覚え書きにおける「人間性の権利 (*die rechte der Menschheit*)」(原文ママ)への言及が有名である (XX 44)。ちなみに、1760年代前半の講義の再現とされている「ヘルダー道徳哲学講義」にも、「人間性の権利」(XX VII 77)という言明が見られる。

性概念の展開を辿っていこう。

『純粋理性批判』の弁証論に位置する「第一節 理想一般について」と題された節において、カントは人間性概念の内実を明らかにしている。まずはカントに従い、「理念 (Idee)」と「理想 (Ideal)」の区別から説明しよう。理念とは、「経験の可能性を踏み越えている概念」(A320/B377) のことであり、それゆえ、それに合致する対象は経験に対しては与えられない。対して理想とは、「単に具体的な理念のことではなく、個体的な、すなわち理念によってのみ規定可能な、あるいは規定される単一なものとしての理念」(A568/B596) のことである。それゆえ、理想は、「理念よりもさらにはるかに客観的実在性から隔たっているように見える」(A568/B596)。さらに理念と理想の関係については注意が必要で、カントは理念によってのみ理想が規定されると述べている。その上でカントは人間性を理想の例として説明しているのは注目に値する。重要でかつ複雑な箇所なので、原文を併記して引用しよう。

そのまったき完全性における人間性は、その本性に属するすべての本質的な諸性質——これらの諸性質が人間性に関する我々の概念を構成する——を、その諸目的と完璧に合致するまで拡張することを含む。このことは、完全な人間性という我々の理念となろう。[しかし、そのまったき完全性における人間性は] さらにそれだけでなく、この概念以外に、その理念の汎通的規定に属するあらゆるものも含む。なぜなら、あらゆる相反する述語の中で唯一のものだけがもっとも完全な人間の理念に適合しうるからである<sup>19</sup>。(A568/B586)

Die Menschheit, in ihrer ganzen Vollkommenheit, enthält nicht allein die

---

<sup>19</sup> この引用文における最後の一文は、いわゆる汎通的規定性に関わる。つまり、汎通的に規定されている個体が、理想として論じられているのである。

Erweiterung aller zu dieser Natur gehörigen wesentlichen Eigenschaften, welche unseren Begriff von derselben ausmachen, bis zur vollständigen Kongruenz mit ihren Zwecken, welches unsere Idee der vollkommenen Menschheit sein würde, sondern auch alles, was außer diesem Begriffe zu der durchgängigen Bestimmung der Idee gehört; denn von allen entgegengesetzten Prädikaten kann sich doch nur ein einziges zu der Idee des vollkommensten Menschen schicken. (A568/B586)

この言明は、人間性の根本的な概念規定をほとんど提示しないカントにおいては非常に示唆的であり、端的に人間性の特徴づけがなされていると解釈されてよいだろう。すなわち、人間性とはその根本においては、「本性に属するあらゆる本質的な諸性質」である。これが人間性の概念 (Begriff) を形成している。この段階の人間性は、まさに人間の「本性」に属するゆえ、人間にすでに備わっているものと理解してよいだろう。さらに、概念としての人間性を構成する諸性質には様々な諸目的があり、これらの諸性質が拡張されてこれらに完全に合致する場合には、人間性は「完全性」へと至る。この「完全な人間性」とは一つの理念 (Idee) である<sup>20</sup>。カントはここでその人間性の理念として、「徳 (Tugend) と、またそれとともにそのまったき純粋さにおける人間的知恵 (Weisheit)」(A569/B597) を挙げているが、もちろん理念としての人間性は経験的には見出されない。

さらにカントは続けて、この人間性の理念に対応する理想 (Ideal)、すなわち、人間性の理念を個体化したものの例として、ストア派の「賢者」(A569/B597) を挙げている。この賢者は、「単に思考の中でのみ存在するものであるが、知恵の理念と完全に合致する人間である」(A569/B597)<sup>21</sup>。理

---

<sup>20</sup> 理念としての人間性については、A318/B374 も参照。

<sup>21</sup> この理念と理想の違いは、『単なる理性の限界内における宗教』(1793年)においても明白である。この著作においてカントは、「そのまったき道徳的完全性における人間性」を

想は理念を個体化したものであり、それゆえ理念よりも客観的実在性から遠ざかっているのである。

当該箇所におけるカントの意図は、あくまで人間性を例にして理想一般を説明することであった。しかし、我々はこの箇所から、カントが人間性に関して抱いていた基本的概念を見出すことができる。つまり、人間性は「本性に属する本質的性質」と「この性質の完全性」、さらには「この完全性が個体化されたもの」という三つの側面、あるいはこう言ってよければ、三重構造をもつ。各々を「(基本的) 概念としての人間性」「理念としての人間性」「理想としての人間性」と呼ぶことができよう。したがって、カントは『純粋理性批判』においてすでに、人間性概念を三層から理解していたことになる。

#### 4. 『基礎づけ』と『実践理性批判』における人間性概念

本節では、『純粋理性批判』以降の代表的な道徳哲学の著作、つまり『基礎づけ』と『実践理性批判』における人間性概念を検討しよう。Menschheit は多くの場合、「目的自体 (Zweck an sich selbst)」や「尊厳 (Würde)」の概念と結びつけられており、これらの概念なしに Menschheit を語ることはできない。それゆえ本節では必要な限りで「目的自体」や「尊厳」に言及することになる。

先に述べたように、Menschheit への言及は様々な著作に散らばっており、その数も非常に多い。これらの言及を一つ一つ拾っていくわけにもいかないので、先行研究による枠組みを借用しよう。

近年英語圏の研究では、人間性の定式における人間性概念の内容に対して、

---

備えた神の子たるイエス・キリストを「道徳的完全性のこの理想」「道徳的心術のまったく純粋性の原型」「神意に適う人間性の(したがってまた、諸欲求と傾向性に依存した世界存在者にとって可能な道徳的完全性の)理想」(VII61)と呼んでいる。

「目的設定能力」<sup>22</sup>「善意志」<sup>23</sup>「道徳性への能力」<sup>24</sup>「尊敬の感情」<sup>25</sup>などの解釈を与えてきた<sup>26</sup>。つまり、人間性の解釈は一致しておらず、むしろ混乱した状況にある。そこでディーンは、人間性に関するもっとも広い区分として二種類の解釈を提示している<sup>27</sup>。一つは、ディーンが「ミニマル解釈」と呼ぶものであり、この解釈によれば、あらゆる理性的存在者が人間性を必然的に所有しており、失いようがない。現代の解釈で優勢なのはミニマル解釈であり、ディーンによれば彼自身の解釈以外はすべてミニマル解釈に属する。対してディーン自身が支持する第二の解釈によれば、人間性とはいまだなき理想<sup>28</sup>である。人間は人間性を必ずしも所有しておらず、むしろその獲得と所有へと努力すべきである。この解釈は古典的なカント研究によって支持されてきたと言える<sup>29</sup>。では、一体カント自身はどちらの解釈を採用しているのだろうか。この二つの解釈<sup>30</sup>を念頭に置いた上で、カント自身の言明を整理してみよう。本節では、人間性の定式が論じられている、道徳哲学の代表的著作である『基礎づけ』と『実践理性批判』を検討する。

まずは『実践理性批判』に目を向けよう。人間性の定式は『基礎づけ』においてはじめて提示されたのだが、『実践理性批判』においても人間性の定式に類似した道徳的命令が言及されている。まずカントは、「人間がもつばら自

---

<sup>22</sup> Korsgaard[1996], Wood[1998], Wood[1999].

<sup>23</sup> Paton[1947], Ross[1954], Kerstein[2002], Kerstein[2006]参照。

<sup>24</sup> Allison[2011]参照。

<sup>25</sup> Atwell[1986]参照。

<sup>26</sup> ヒルは、「合理性や諸目的を設定する能力と必然的に結びついた能力のみを含むものとして、人間性を構成するのがもっとも理に適っている」という想定の下、五つの用法をまとめあげている。しかし、実際のところヒルはカントが「人間性」という言葉を使用していない箇所を引用しているため、正確な分類であるとは言いがたい。Hill[1992:40-1]参照。

<sup>27</sup> Dean[1996], Dean[2006]参照。

<sup>28</sup> ディーンは「理想 (ideal)」という言葉を使っているが、これは本稿第三節で紹介した『純粋理性批判』における「理想」ではなく、むしろ「理念」を指すと理解すべきである。Dean[2006:46-49]参照。

<sup>29</sup> 人間性の理念的な性格を指摘するものには、Cohen[1877:223], Ebbinghaus[1968:147], Richter[2013:86]がある。

<sup>30</sup> ここで本稿註7において言及した人間性の概念史上の区分に従うならば、前者の解釈は「自然的人間性」、後者の解釈は「理想的人間性」に対応していると言える。

己自身に与えることができる価値の不可欠な条件はいかなる根源に由来するのか」(V 86) という問いを提示する。カントはその答えを「人格性 (Persönlichkeit)」に求める。人格性とは、消極的自由、すなわち「全自然機構からの自由と独立性」のみならず、積極的自由、すなわち「自律」を意味する<sup>31</sup> (V 87)。人間はこの人格性によって感性界のみならず叡知界にも属するものと見なされうる。そしてこの人格性の所有ゆえに、人間のみならず他のあらゆる理性的存在者は目的自体として扱われねばならないのである。ここで注目すべきは、カントが「人格性」と「人間性」を言い換え可能なものとして使用していることである(V 87)<sup>32</sup>。人格性とは、神のみがもつ神性ではない。確かに人間は一方では感性界に属するが、他方で叡知界に属する限りにおいて、その人格性に服従していると言えるのである。その上で、カントは人格性を人間の観点から言い換えたものとして、人間性という語を使用しているのである。

さらにカントは、「尊敬を呼び起こす人格性の理念」(V 87) は、我々人間の行為がこの理念に適合していないことを気づかせ、「自惚れ (Eigendünkel)」を打ちのめすと述べる。つまり、我々が心に抱く自由、すなわち人格性の理念は、実際に我々の行為がこの理念に至っていないことを気づかせ、自惚れ、すなわち「自己に関する適意の自己愛」(V 73) を打ちのめす。もちろん逆に言えば、我々がこの人格性の理念に基づいて実際に行為する場合には、この人格性の理念に従って自己を肯定的に評価することができるのである。それゆえ、『実践理性批判』における人間性は人格性を言い換え可能であることを鑑みれば、人間性は理念であると結論することができる。

---

<sup>31</sup> 二つの自由概念については、V 33 で説明されている。

<sup>32</sup> 人間性は『基礎づけ』以外の著作においても、人格性(ないしは自由)と同一視されることが多い(VI 239, X X VII 627)。和辻[1962], Ricken[1989:239], 平田[1996:123]は、人格性と人間性を区別していない。

次に、『基礎づけ』における人間性概念に目を向けよう。すでに述べたように、人間性の定式は『基礎づけ』においてはじめて定式化されている。『基礎づけ』においては「人格性」という語は使われておらず、人間性に関する明瞭な説明や定義も見当たらない。

まず示唆的なのは次の引用文である。「それによって何かほかの達成されうる目的や利益がなくとも、理性的本性としての人間性の尊厳、したがって単なる理念への尊敬が、意志のなおざりにできない指令として役立つべきである […]」<sup>33</sup> (IV439)。ここで端的に言われているのは、尊厳ある人間性あるいは理性的本性<sup>34</sup>は、あくまで理念であるということである。では、この尊厳ある人間性が理念であるという根拠は何なのか。

カントはこの問に対して「自律」と答えている。「それゆえ、自律が、人間およびあらゆる理性的存在者一般の尊厳の根拠である」(IV436)と述べられている通りである。ここで重要なのは、「意志の自律」つまり、「積極的自由」とは有限な理性的存在者たる人間にとっては理念にすぎない、ということである (IV431, 432, 448-9)。したがって、目的自体としての人間性も同時に理念たらざるを得ないのである。同様に、「我々の意志が、つまり、理念において我々に可能なこの意志が尊敬の本来の対象であり、人間性の尊厳はこの普遍的に立法する能力のうちにこそ存する […]」(IV440)という言明からも、自律的意志すなわち自己立法的意志が理念でしかないこと、そしてこの意志に人間性の尊厳が存することが述べられている。

さらに自殺に関する例を取り上げよう。カントは自殺の禁止を説明する際に、自殺は「目的自体としての人間性の理念」と両立しないと述べている (IV

---

<sup>33</sup> カントはこの命題をパラドックスとして提示している (IV439)。類似した記述はIV434にもある。

<sup>34</sup> 「理性的本性」という表現にも一言付しておこう。『基礎づけ』においてカントがしばしば人間性と言い換える「理性的本性」とは、『実践理性批判』における人格性の言い換えと理解すべきであろう。『基礎づけ』においては「理性的本性」という語は散見されるが、実は人格性という語は使用されていない。対して『実践理性批判』においては理性的本性という語が見られない代わりに、新たに人格性という語が導入されている。

429)。つまり、自己立法的な意志という理念と両立しえないがゆえに、自殺は禁止されているのである。

したがって、『基礎づけ』における目的自体としての人間性も理念であるとひとまず結論することが許されよう。すなわち、人間はいまだこの人間性を所有していないのである<sup>35</sup>。この点において、あらゆる人間が人間性をもつと理解する「ミニマル解釈」は根本的に誤っていたことになる。したがって少なくとも『基礎づけ』や『実践理性批判』における人間性の定式において、人間性に関するミニマル解釈は成立しない。

ところが、『基礎づけ』においては、目的自体としての人間性とは異なる文脈の中で人間性は二度言及されている。両者とも、道徳法則の妥当性をめぐる注意書きに位置する。まず、言うまでもなく、カントが試みているのは「純粹道徳哲学」(IV389) すなわち「道徳形而上学」(IV410) であり、あらゆる経験を排し、かえって人間のみならずあらゆる理性的存在者に妥当する道徳原理を提示しようとするものである。それゆえ、カントが言うには、「人間性の特殊な自然素質」(IV425)「人間性の偶然的諸条件」(IV408) から導き出された原理は、人間に格率を提供こそすれ、法則を手渡すことはできない。すなわち、あらゆる経験的なものを捨象した道徳形而上学に反するものとして、この人間性は道徳の根拠から排除されねばならないと言われているのである。目的自体としての人間性とは異なり、ここで言われている人間性は理念ではありえない。むしろ、少なくとも人間にはすでに備わっている自然素質として理解さねばならないだろう。

さらに、人間性の定式を使用して「自己に対する不完全義務」としての「自己完成」を説明する際に、カントは自然素質としての人間性を再び引き合い

---

<sup>35</sup> 「人間が人間性をもたない」とは、語義矛盾ではない。なぜなら、概念史的観点からすれば、カントはここで「自然的人間性」ではなく、「理想的人間性」に言及していると理解することができるからである。人間は人間性の思想を心に抱くことはできるのであり、これこそ、理念の実践的意義である。

に出している。カントは次のように、自己完成の義務を説明している。まず、「人間性の内には、より大きな完全性への諸素質がある […]」(IV430)。この素質を放置することは、確かに人間性と矛盾はしない。しかし、我々はこの人間性を維持し、それに反しないだけでなく、これと調和し、これを促進しなければならない。それゆえ、自己の素質を開拓し、完成する義務が生じるのである。ここで言及されている人間性も、理念ではなく、人間にすでに備わっている素質である<sup>36</sup>。一つ注意すべきは、自然素質としての人間性、すなわち理念ではなく人間にすでに備わっている人間性は、道德の基礎としては否定されているものの、「自己完成の義務」において再び肯定的に論じられていることである。

では、上の人間性概念と『純粋理性批判』における人間性の規定とはいかに符号するであろうか。まず、理念としての人間性は『基礎づけ』や『実践理性批判』においても言及されている。『純粋理性批判』によれば、理念としての人間性とは、完全な人間性であり、徳のことであった。対して『基礎づけ』においては、理念としての人間性は目的自体であると言われており、一言でいえば自律的人間性のことである。『純粋理性批判』においては、道德の具体的な構想はまだ語られておらず、それゆえ、その完全性における人間性は単に「徳」としてしか表現されなかった。しかし、『基礎づけ』に至り、カントは自律によって道德性を基礎づけるという構想を展開したため、その理念は「自律的存在者」であると明言されるのである。カントは「道德的に善い心術、すなわち徳は、理性的存在者に普遍的立法への参与 (Anteil) を与える」(IV435) と述べているが、『基礎づけ』に至ってはじめて「徳」が普遍的立法への参与、すなわち普遍的自己立法を与えるものとして描かれるのである。

---

<sup>36</sup> このような義務の正当化の仕方には問題があるだろうが、人間性の用法を整理するという本稿の目的に従い、この問題は脇に置き、カントは人間にすでに備わっている自然素質としての人間性に言及しているということを確認するにとどめておこう。

対して、概念としての人間性、すなわち「本性に属する性質」はどうか。『基礎づけ』や『実践理性批判』においてこの人間性はあまり詳細に論じられていないものの、確かに我々は『基礎づけ』においても、理念ではなく、人間にすでに備わる人間性を自然素質という形で見出すことができた。しかし、この人間性を比較的肯定的に扱っている「自己完成」をめぐる議論においてさえ、この自然素質が何に存するのか、そしてこの自然素質は何へ向けて完成されるべきなのか、という問いが残されたままなのである。

## 5. 『道徳形而上学』における人間性概念

本節で取り上げるのは、晩年の道徳哲学的著作『道徳形而上学』である。『道徳形而上学』は、道徳形而上学の「基礎づけ」と実践理性の「批判」を受けて、道徳形而上学を体系化する試みの書である。この著作においても人間性概念は多用されており、その議論に注目することで、人間性概念の展開を見届けよう。

本節が注目するのは、「自己に対する義務」に関する人間性への言及である。「同時に目的である義務」を扱う「徳論」において、「自己に対する義務」は「自己の完全性(Vollkommenheit)」であると言われている。それは「人間一般(本来的には人間性)に属する完全性」(VI386)、すなわち「人間の能力(あるいは自然素質)の開拓(Kultur)」(VI387)<sup>37</sup>である。完全性には「量的(実質的)完全性」と「質的(形式的)完全性」がありうる。前者は「総括されて一つの事物を構成する多様なものの全体」、後者は「物の性質がある目的と合致していること」である(VI386)。カントがいうには、ここでの自己の完全性とは、後者の「質的完全性」に当たる。つまり、簡単に言えば人間がもつ性質がその目的と一致していない状態から、一致している状態への完成こそ、質的完全性なのである。したがってこの完全性の義務は、人間がもつ能力や自然素

---

<sup>37</sup> Kultur については宇都宮[2006:209-210]に詳しい説明がある。

質をその目的に一致させることであると言える。カントはこれがかっこ付きではあるが、「人間一般（本来は人間性）に属する完全性」（強調は筆者）と呼ぶのである。少なくともこのことからわかるのは、これらの能力や自然素質は、人間にすでに備わったものとして考えられているということである。さもなければ、カントは「量的完全性」を論じていることになるだろう。

ちなみに、この「人間性の発展・完成」という考え方は、『教育学』（1803年）にも見出すことができる。カントは、人間が教育を必要とすることを次のように述べている。すなわち、「人類は人間性の全自然素質を、自らの努力によって徐々に自己自身の中から引き出すべきである」（IX441）。教育とは、人間性の自然素質を発展させることなのである。つまり、カントはここでも人間性を、完全性以前の自然素質や能力として捉えている。そしてこれらの自然素質を目的に合致させ、完全性に近づけることを教育の課題としているのである。

ここでひとまず指摘しておきたいのは、カントは『道徳形而上学』において特に開発されるべき能力として、「目的設定能力」と「道徳的感情」をあげていることである（VI387）。この点に『基礎づけ』の「自己に対する不完全義務」に関する議論の深化が見られる。順に説明していこう。

第一に、「道徳的感情」<sup>38</sup>は、感性的感情ではない。すなわち、法則の表象に先行するのではなく、逆に法則を表象する結果なのである。人間はすでにこの感情を根源的にもっているので、この感情をあらためてもつという義務はありえず、あくまでこれを開拓するという義務のみがありうる。さらにカントは、この感情が麻痺している場合には、人間性は動物性へと溶解するとまで述べている（VI400）。つまり、カントは、これらは動物によっては所有されず、かえって人間の本質を形成すると考えているのだ<sup>39</sup>。

---

<sup>38</sup> 本段落では、VI399-400における道徳的感情の説明をまとめる。

<sup>39</sup> Menschlichkeitとしての「同情」と Menschheitとしての「道徳的感情」は異なることに注意したい。

第二に、「目的設定能力」についてカントは次のように説明している。「総じて何らかの目的を自己に設定する能力は（動物性から区別された）人間性の特徴的なものである」（VI391）。「人間性によって人間のみが自己に諸目的を設定することができる」（VI387）。これらの言明は、現代の多くの論者が人間性の定式を論じるにあたり引き合いに出す点において重要であると言える<sup>40</sup>。確かにカントは公刊著作ではこれらの箇所においてのみ、人間性概念を『純粹理性批判』における言及のように概念的にはなく、内容的かつ直接的に定義を与えている。カントはこの目的設定能力はすでに人間に与えられており、これに値するようにこの能力を開拓せねばならないと指摘しているのである。

人間性概念に関するミニマル解釈はここではじめてすくい出される。つまり、道德感情と目的設定能力は、理念ではなく、すべての人間にすでに備わっている。その上で、これらを質的に発展させ、完成させること、すなわちその目的へと一致させることが求められているのである。

これまでから人間性概念に関して理解できることを析出してみよう。ここでカントが人間性を語る際に強調するのは、その理念性ではなく、単に動物性との違いである。もちろん、カントの人間観に従えば、人間もある種の動物性を共有しており、人間もある種の動物である。しかし、カントが人間性を単なる「人間本性 (menschliche Natur)」ではなく、「本質的性質」(A568/B586) 「特徴的な固有性」(X X VII671) という言葉で表現する背景には、「人間性は、動物には所有されない、人間にとって本質的で固有な性質である」という人間性概念が控えているのである<sup>41</sup>。このことは、すでに本稿第一節で確認し

---

<sup>40</sup> とりわけ Korsgaard[1996:110]参照。しかし、『基礎づけ』の人間性の定式における人間性がこの目的設定能力のみを指示しているかはまた別の議論を必要とするだろう。

<sup>41</sup> ただし、「人間の本質」と言っても、我々は人間と動物を比較することしかできない。なぜなら、動物は経験に与えられているが、人間以外の理性的存在者（例えば、地球外生命）体は経験に与えられていないので、他の理性的存在者と人間を比較することはできないからである。

たように、「ヴィギランティウス道徳形而上学講義」において、動物ももつ同情を *Menschheit* ではなく、あくまで *Menschlichkeit* と呼んだことと一致するのである。

さて、人間性の質的完全性の議論に戻れば、ここで問題になっているのは目的論である。つまり、この人間性は何に向けて、何のために展開されるべきなのか。『基礎づけ』の議論にはこの視点が欠けていた。そうすると、次に問われるべきは、「人間性の目的」は何であるか、である。人間性の目的論は、批判期の講義録にも見られる。批判期の講義録とされている「コリント道徳哲学講義」においては、「人間性の普遍的目的は最高の道徳的完全性である」(X X VII470)とされている<sup>42</sup>。道徳の基礎として幸福主義を否定し、『実践理性批判』において最高善の条件として最上善の優先性を説いたカントにしてみれば<sup>43</sup>、人間性の目的が道徳的完全性であることは驚くに足りない。

その表現は異なるものの、同様の考えは『道徳形而上学』にも見られる。「道徳的に完成した人間性の理想(Ideal)に向けられるあらゆる称賛は、人間が現にあり、かつてあった、そして多分未来においてあるであろう反証の実例をもってしても、その実践的な実在性をいささかも失うことはありえない」(VI405)。この言明からわかるのは、理想としての人間性とは道徳的に完成した人間性である、ということである。つまり、ここでカントは人間性の理想を「道徳的完全性」と捉えることで、すでに完全性の「行先」、すなわち「目的」を明確にしていたのである。

以上のように、『道徳形而上学』において展開された人間性概念は、『基礎づけ』における自然素質としての人間性、そしてこれを完成させるという自己に対する不完全義務をめぐる議論の深化と見ることができる。しかし、かえって背景に退いて見えるのは、理念としての人間性、そして『基礎づけ』

---

<sup>42</sup> Menzer[1924:317]も参照。

<sup>43</sup> V 110-を参照。

において確立された自律的人間性の理念である。そこで、最後に自律的人間性が『道徳形而上学』における完全性の議論の中に占める位置を確認しておこう。

まず、『道徳形而上学』における自律の所在を確認しよう。確かに概して自律概念は『道徳形而上学』においては背景に退いている。しかし、カントは「徳の格率は各々の人間の実践理性の主體的自律に存する」(VI480)と述べており、他律ではなく自律が道徳を基礎づけねばならないという見解は批判期から変わらない。ここで「徳」とは「意志の道徳的強さ」のことであり、「実践的知恵」とも言い換えられている(VI405)。その上でカントは「有徳な人」を「道徳的に完成した人間性の理想」(VI405)と呼ぶのである。それゆえ、徳・知恵・自律・道徳的完全性・理念としての人間性には連続性があることがみてとれる。すなわち、目指される徳(知恵)とは、自律に存するのである。道徳的に完全な人間性とは、純粹に自律的な人間性を指していると理解してよいだろう。この「徳」や「知恵」という言葉遣いが『純粹理性批判』や『基礎づけ』のそれを受けていることは言うまでもない。

ここで注意すべきは、カントは自然素質としての人間性の中に意志の自律を含ませていない点である。単なる目的設定は、いまだ自律ではない。『基礎づけ』において言われていたように、自律は目的自体としての人間性ととも理念なのであり、人間にすでに与えられているわけではない。したがって、すでに人間に備わっている人間性としての目的設定能力は自律へと完成されねばならないのである。カントはあくまで目的設定能力を「(動物性から区別された)人間性の特徴的なもの(das Charakteristische der Menschheit)」(VI392)としてしか述べていないが、これは単に動物性との境を示した言葉遣いであって、この目的設定能力は単にこの境であることを超えて自律的完成へと促進されねばならないのである。

## 6. 結論

本稿は、カント道徳哲学における人間性概念が一枚岩ではないことを明らかにしてきた。広義の「人間性」には四つの側面があった。まずもって *Menschlichkeit* は *humanitas* の訳語である側面をもちつつも、「動物には欠けている」というカントが目指す人間性概念の要件を満たしていない。それゆえ、*Menschlichkeit* はむしろ動物性に接近している。その上で、まず『純粋理性批判』における *Menschheit* には三つの層が存在することが確認された。第一に、本性に属する本質的諸性質である。第二に、理念としての人間性、完全な人間性、すなわち「徳」は、無時間的で固定的な理念である。第三に、この理念としての人間性が個体化された理想としての人間性である。『基礎づけ』と『実践理性批判』における目的自体としての人間性は、理念としての第二の人間性であり、自律的人間性として提示されていた。晩年の『道徳形而上学』においては、自己完成の義務に関して、人間性は人間にすでに備わっている能力や自然素質として論じられている。つまり、第一の概念としての人間性である。この人間性は、動物性から区別される。この人間性は人間の本質でありつつも、時間的で変動的な素質である。さらにこの人間性は単なる動物性との区別を超えて、『基礎づけ』によって確立された理念としての自律的人間性へと完成されねばならないのである。最後に、本稿註 21 で指摘したように、理想としての第三の人間性は道徳哲学的著作においてはあまり扱われておらず、これは『宗教論』に受け継がれることになる。

しかし、本稿は依然として限定的な議論にとどまっている。というのも、本稿は検討対象を主に道徳哲学の主著に限ったため、『判断力批判』(1790年) 『宗教論』 『実践的見地における人間学』(1798年)、そして『世界市民的見地における普遍史の理念』(1784年) や『人類史の憶測的始原』(1786年) な

どの歴史哲学的論文における人間性概念の検討が欠けているのである。この点は今後の課題としたい。

## 文献表

### 一次文献

Kant, Immanuel. [1910-] *Kant's gesammelte Schriften*, (hrsg.) Königlich-Preußische Akademie der Wissenschaften, Berlin: G. Reimer.

Kant, Immanuel. [1998] *Kritik der reinen Vernunft*, (hrsg.) Jens Timmermann, Hamburg: Felix Meiner.

Kant, Immanuel. [1999] *Grundlegung zur Metaphysik der Sitten*, (hrsg.) Bernd Kraft und Dieter Schönecker, Hamburg: Felix Meiner.

Kant, Immanuel. [2003] *Kritik der praktischen Vernunft*, (hrsg.) Horst D. Brandt und Heiner F. Klemme, Hamburg: Felix Meiner.

Kant, Immanuel. [2008] *Metaphysische Anfangsgründe der Tugendlehre*, , (hrsg.) Jens Timmermann, Hamburg: Felix Meiner.

なお、カントの著作の日本語訳については、宇都宮芳明訳(以文社)と岩波書店版のカント全集を適宜参照した。

### 二次文献

Allison, Henry. [2011] *Kant's Groundwork for the Metaphysics of Morals: A Commentary*, Oxford: Oxford University Press.

Atwell, John E. [1986] *Ends and Principles in Kant's Moral Thought*, Dordrecht: Martinus Nijhoff Publishers.

Bödeker, H.E. [1982] "Menschheit, Humanität, Humanismus," *Geschichtliche Grundbegriffe: Historisches Lexikon zur politisch-sozialen Sprache in*

- Deutschland*, (hrsg.) O. Brunner., Bd.3, Stuttgart: Klett-Cotta Verlag, pp. 1063-1128.
- Cohen Hermann. [1877] *Kants Begründung der Ethik*, Heildesheim: Georg Olms Verlag, 2001.
- Dean, Richard. [1996] "What Should We Treat as an End in itself?," *Pacific Philosophical Quarterly* 77, pp. 268-288.
- Dean, Richard. [2006] *The Value of Humanity in Kant's Moral Theory*, Oxford: Oxford University Press.
- Ebbinghaus, Julius. [1968] "Die Formeln des kategorischen Imperativs und die Ableitung inhaltlich bestimmter Pflichten," *Gesammelte Aufsätze Vorträge und Reden*, Hildesheim: Georg Olms.
- Garve, Christian. [1986] *Abhandlung über die menschlichen Pflichten, aus dem Lateinischen des Marcus Tullius Cicero*, ; mit einer Vorrede von Kurt Wölfel. - - T. 1., -- G. Olms, -- (Gesammelte Werke / Christian Garve ; herausgegeben von Kurt Wölfel ; 3. Abt. . Die kommentierten Übersetzungen ; Bd. 9).
- Garve, Christian. [1987] *Abhandlung über die menschlichen Pflichten, aus dem Lateinischen des Marcus Tullius Cicero*, ; mit einer Vorrede von Kurt Wölfel. - - T. 2., -- G. Olms, -- (Gesammelte Werke / Christian Garve ; herausgegeben von Kurt Wölfel ; 3. Abt. . Die kommentierten Übersetzungen ; Bd. 10).
- Haardt, Alexander. [1982] "Die Stellung des Personalitätsprinzips in der Grundlegung zur Metaphysik der Sitten und in der Kritik der praktischen Vernunft," *Kant-Studien* 73, pp. 157-168.
- Hegel, G. W. F. [1986] *Vorlesungen über die Geschichte der Philosophie II: Werke* 20, Freiburg am Main: Suhrkamp Verlag.
- Hill, Thomas, E. Jr. [1992] *Dignity and Practical Reason in Kant's Moral Theory*, Ithaca and London: Cornell University Press.

- Kerstein, Samuel J. [2002] *Search for the Supreme Principle of Morality*, Cambridge: Cambridge University Press.
- Kerstein, Samuel J. [2006] “Deriving the Formula of Humanity,” *Groundwork for the Metaphysics of Morals*, (ed.) Christoph Horn and Dieter Schönecker, Berlin: Walter de Gruyter, pp. 200-221.
- Korsgaard, Christine. [1996] *Creating the Kingdom of Ends*, Cambridge: Cambridge University Press, 2000.
- Menzer, P. (hrsg) [1924] *Eine Vorlesung Kants über Ethik*, Berlin: Pan Verlag Rolf Heise.
- Paton, H. J. [1947] *The Categorical Imperative*, Philadelphia: University of Pennsylvania Press, 1971.
- Rawls, John. [2000] *Lectures on the history of Moral Philosophy*, (eds.) Barbara Herman, Cambridge: Harvard University Press. (翻訳：『ロールズ哲学史講義：上』坂部恵(監訳)、久保田顕二他(訳)、みすず書房、2005年)
- Reich, Klaus. [1935] *Kant und die Ethik der Griechen*. Tübingen: J.C.B. Mohr.
- Richter, Philipp. [2013] *Kants “Grundlegung zur Metaphysik der Sitten: Ein Systematischer kommentar,”* Darmstadt: Wissenschaftliche Buchgesellschaft.
- Ricken, Friedo. [1989] “Homo noumenon und homo phaenomenon,” *Grundlegung zur Metaphysik der Sitten : Ein kooperativer Kommentar*, (hrsg.) Otfried Höffe, Frankfurt am Main: Vittorio Klostermann, pp. 234-252.
- Ross, D. [1954] *Kant’s Moral Theory : A Commentary on the Grundlegung zur Metaphysik der Sitten*, London: Oxford University Press.
- Trendelenburg, Adolf. [1908] “Zur Geschichte des Wortes Person,” *Kant-Studien* 13, pp. 1-17.
- Warda, A. [1922] *Immanuel Kants Bücher*, Verlag von Martin Breslauer.
- Wimmer, Reiner. [1990] *Kants kritische Religionsphilosophie*, Berlin: Walter de

Gruyter.

Wood, Allen. [1998] “Humanity as End in Itself,” *Kant’ Groundwork of the Metaphysics of Morals: Critical Essays*, (ed.) Paul Guyer, Lanham: Rowman & Littlefield Publishers, pp. 165-187.

Wood, Allen. [1999] *Kant’s Ethical Thought*, Cambridge: Cambridge University Press.

稲垣良典 [2009] 『人格«ペルソナ»の哲学』 創文社。

宇都宮芳明 [2006] 『カントの啓蒙精神：人類の啓蒙と永遠平和にむけて』 岩波出版。

小倉貞秀 [1965] 『カント倫理学研究：人格性概念を中心として』 理想社。

小倉貞秀 [2010] 『ペルソナ概念の歴史的形成：古代よりカント以前まで』 以文社。

高坂正顕 [1952] 「人格とは何か」『人間と倫理』 創文社編集部編、新倫理講座 第3巻。

浜田義文 [1974] 「カントにおける人格の概念」法政大学文学部紀要

平田俊博 [1996] 『柔らかなカント哲学』 晃洋書房。

三木清 [1967] 「人間主義」『三木清全集：第五巻』 岩波書店、187-244 頁。

和辻哲郎 [1962] 「人格と人類性」『和辻哲郎全集：第九巻』 岩波書店、319-479 頁。

矢島洋吉 [1952] 「人間性の問題」『人間と倫理』 創文社編集部編、新倫理講座 第3巻。

(たかき ゆうき 京都大学大学院 文学研究科 博士後期課程)